言語資料としての聖書の英語*

橋本　功

0．はじめに

近代英語期の英訳聖書には同時代の文献に比べて実に多様な種類の構造を持つ文が出現している。そのためにそれらを，仮説の実証に援用したり，英語統語論の枠組みの中で分類したり，あるいは，英語史の視点から出現の原因を考察する等，様々な角度から分析され，議論の対象にされてきた。それらは，多くの場合，関係する理論や枠組みの中では説得力がある。しかし，引用するデータが翻訳英語であるために，それを言語資料として利用するには起点言語の影響の有無を精査することが必要である。そのプロセスを踏んでいないために，引用された言語資料に言語事実とは異なる説明が与えられていることがある。以下はその例である。

1a—c の構造を持つ文は破格構文と呼ばれている。破格構文は欽定訳聖書に頻繁に起こっている。この現象について Otsuka(1967：45-55) や Visser(1963：55) は「フランス語の影響によるものであろう」と述べている。しかし，これらは原典のヘブライ語では，文中の名詞（句）を強調しようとする時に使用される最も一般的な統語法である。すなわち，強調しようとする名詞（句）の格が何であろうとも，それを主格に変更した後，文頭に移動し，名詞（句）があった位置には名詞（句）と同じ格の代名詞を置く。この語順がヘブライ語の強調構文の特徴である。1d はその例文である。この訳から1c の構造の文が英訳聖書に出現している。欽定訳聖書の「破格構文」のほとんどは，ヘブライ語のこの強調構文を直訳したために出現したものである。詳細は Hashimoto（1998：143-44）参照。

1．a. *thy rod and thy staffe,* they comfort me.　(AV, *Ps*. 23：4)
　b. *these* where had they beene？　(AV, *Isa*. 49：21)
　c. *I*, euen my handes haue stretched out the heauens,　(AV, *Isa*. 45：12)
　d. $\underbrace{\text{'ănî}}_{1}$ yāda $\underbrace{\text{-y}}_{2}$ nātû šāmayim
　　(＝*I*[1] hands-of-me[2] stretched-out heavens)　(HB, *Isa*. 45：12)

下記 2a の this は期間を表す複数形名詞を修飾している。筆者の調査では，この種の指示代名詞の例は欽定訳聖書には１例しか起こっていない。Partridge（1973：128）はこの現象の説明を unified plural に求めている。しかしながら，この this に対応する原典の表現は2b の単数形指示代名詞＜zeh＞である。この指示代名詞の機能は Partridge の説明とは異なり，期間や量が十分であることを示すことである。詳細は Hashimoto（1998：68）参照。2a の指示代名詞 this は，この機能を持つ原典の指示代名詞の訳として出現したものである。

2. a. *This* twentie yeeres haue I bene with thee: (AV, *Gen.* 31 : 38)
   b. zeh ʻeśrîm šānāh ʼānōḵî ʻimmāḵ (HB, *Gen.* 31 : 38)
   (=this tewnty year I {have been} with-you)

例文3a では比較の基準となる名詞 grasse に定冠詞が付加されていない。この現象について Christophersen (1939 : 150) は,「古い統語法である」と述べている。確かに古英語期にはこのような環境でも無冠詞が許された。しかし, 3a の grasse は原典の無冠詞の名詞の逐語訳である。従ってこの無冠詞は起点言語の統語法に負うところが大きいと考えるのが妥当であろう。原典の言語においてもこのような環境に置かれた名詞には, 英語におけるのと同様, 定冠詞を付加するのが原則である。しかしながら, ヘブライ語文3b が示すように問題の名詞は属格の修飾語句を従えている。このような場合, 被修飾語は定冠詞をとらないのがヘブライ語の統語法である。この起点言語の統語法が欽定訳聖書にもたらされたのが3a である。

3. a. they of the citie shall flourish *like grasse* of the earth. (AV, *Ps.* 72 : 16)
   b. wəyāṣîṣû mēʻîr kə-ʻēśeb hāʼāreṣ: (HB, *Ps.* 72 : 16)
   (=and-they-may-flourish from-city like-grass-of[1] the-earth[2])

OED は4a におけるように answered and said が新約に頻繁に起こっている現象に言及して, これはヘレニズムであると述べている。4 の例文のうち4a-1は古英語訳聖書からの例であり, 4a-2は初期近代英語訳聖書からの例である。OED の説明とは異なり, この現象は古英語訳聖書以来, 新約だけではなく旧約においても頻繁に起こっている。4b の 2 例のうち, 4b-1は古英語訳聖書からの引用であり, 4b-2は初期近代英語訳聖書からの引用である。

4. a-1. Da *andswarode* Nichodemus & *cwæð* (*Anglo-Saxon Gospels, John* 3 : 9)
   a-2. Nicodemus *answered, and said* (AV, John 3 : 9)
   b-1. þa *andswarode* Issac ⁊ *cwæð* (*O.E. Heptateuch, Gen.* 27 : 37)
   b-2. And Isaac *answered and saide* (AV, *Gen.* 27 : 37)
   b-3. wa-yyaʻan yiṣḥāq wayyōʼmer śamtîw lāḵ (HB, *Gen.* 27 : 37)
   (=and-*answered*[1] Isaac and-said[2])

英訳聖書には answered and said の連語だけではなく, 5 の例文におけるように, 同一の動詞が連続する say-said, say-saying も頻繁に起こっている。

5. Thus saith the LORD of hostes the God of Israel, saying; Yee and your wiues haue both spoken with your mouths, (AV, *Jer.* 44 : 25)

このような連語が英訳聖書に頻繁に出現するのには，旧訳原典のヘブライ語の話法が関与している。原典では話法のほとんどが直接話法である。ヘブライ語では直接話法を導入するために，伝達動詞の後に再び特定の伝達動詞を直接話法の導入詞として用いる。そのために，原典では「[伝達動詞]＋[直接話法導入のための[伝達動詞]]」のように，伝達動詞が2回続く現象が至る所で起こっている。直接話法を導入するヘブライ語の2番目の伝達動詞の意味が英語の say に対応している。そのために，この連語の訳が英訳聖書に「伝達動詞＋say, said, saying」を多数出現させている。このヘブライ語法が新約にも頻繁に起こるのは，ギリシャ語訳聖書 Septuagint を経由して，このヘブライ語法が新約のギリシャ語にもたらされたためである。詳細は橋本（1996：113-116）参照。

6a の3行目にある imagine が man に対して複数呼応をしている。この現象について，Ichikawa（1969：77）等は，1行目の the euill man と2行目の violent man の2つの名詞を先行詞としているためであると説明している。

6. a. DEliuer me, O LORD, from the euill man:
preserue me from the violent *man*.
Which *imagine* mischiefes in their heart: （AV, *Ps*. 140：1-2）

b. ḥalləṣēnî yəhōwāh mē-'ādām rā' mē-'îš ḥămāsîm tinṣərēnî:

	1	2	3	4
	N	Adj	N	Adj
	[M·S]	[M·S]	[M·S]	[M·Pl]

'ăšer ḥāšəbû rā'ôt bəlēb kol-yôm yāgûrû mihāmôt:

	5	6
	[V](3·M·Pl)	[V](3·M·Pl)

（=rescue-me Yahweh from-*man*[1] *evil*[2] from-*man*[3] *violent*[4] protect-me
who *devise*[5] evil-things in-heart all-day *they-stim-up*[6] wars）

6a に対応する原典の文6b の1行目と2行目は旧訳原典では頻繁に用いられている併行体を構成している。この場合，二行目の文は一行目の文と同じ構造の文であるが，1行目の文の語順を2行目では逆にするという手法を用いている。ただし，1行目と2行目には互いに異なる語が使用されているが，対応する語はそれぞれ同じ意味を表している。これらのことから，原典の2行目にある関係代名詞<'ăšer>の先行詞は1行目の単数名詞<'îš>（=man）であると同時に，同じく1行目の単数名詞<'ādām>（=man）でもある。決して，2つの異なるNPを先行詞としているのではない。ではなぜ原典の関係節の動詞<ḥāšəbû>（=devise）が単数名詞に対して，複数呼応しているのかという疑問が残る。これについては，man に対応する原典の名詞<'îš>が単・複同形であることと，その修飾語の形容詞<ḥămāsîm>が複数形であることが，この呼応現象の説明を可能にする。

1．間接訳聖書と直接訳聖書における原典の言語の影響

1．1　間接訳聖書における原典の言語の影響

英訳聖書史上，原典からの直接訳は W. Tyndale の訳（新約 1525，旧訳（*Pentateuch*）

1530）から始まる。それ以前の英訳聖書はすべてラテン語訳聖書 Vulgate からの間接訳である。英訳聖書を言語資料とする際に注意しなければならないのは，間接訳聖書においても原典の統語法が出現していることである。以下は，典型的な例である。

7. a. EWB : þe hil of sion *in whiche* þou dwelledest *in it* /
   b. VUL : tuae mons Sion *in quo* habitasti *in eo*
   c. HB : har-ṣiyyon ze šāḵantā *bô*
   （=mount-Zion *this* you-have-dwelled *in-it*）
   d. NRS : Mount Sion, *where* you came to dwell. （*Ps*. 74(73)：2）
8. a. EWB : lo þe lord oure god *þis* we han abiden *hym* :
   b. VUL : Ecce Deus noste *iste*, expectavimus *eum*,
   c. HB : hinnēh ʾĕlōhênû zeh qiwwînû *lô*
   （=behold god-of-us *this* we-waited-for-*him*） （*Isa*. 25：9）

7a と8a は1384年頃にラテン語訳聖書を底本として訳出された Wycliffe 訳聖書からの引用である。7a では，「前置詞＋関係代名詞」in whiche が関係節内で「前置詞＋代名詞」in it によって反復されている。7a と類似の構造は古英語期に存在したが，中英語期には極めて希な構造である。これれを対応するラテン語訳聖書の文7b と比較すると，7a の in it はラテン語の in eo の訳であることが明らかになる。すなわち7a の構造はラテン語の逐語訳からもたらされた構造である。次に。7b を対応するヘブライ語表現7c と比較すると，7b のラテン語の構造は，ヘブライ語原典の逐語訳から来ていることが明らかになる。結論として，7a の構造は原典の構造がラテン語訳を経由して中英語訳聖書に出現したことが明らかになる。

ヘブライ語の関係代名詞には複数の種類がある。7c と8c では，指示代名詞が関係代名詞として使用されている。ヘブライ語の関係代名詞は格変化をせず，先行詞を関係節内で反復する。従って，ヘブライ語の関係代名詞は英語の関係代名詞の初期の段階に近く，その機能の中心は連結詞である。そのために，古英語の関係代名詞と同様，関係代名詞の機能を明確にするために，先行詞を代名詞化して関係節内に置く。8c はその例である。それがラテン語訳で保持された結果，Wycliffe 訳聖書において8a として出現している。ただし，翻訳者がこの指示代名詞を関係代名詞と認識していたか否かは問題が残るところである。

9a は古英語期の『懺悔の書』からの引用であるが，ラテン語訳聖書から翻訳・引用したものである。その中に定冠詞も限定詞も伴わない同族目的語が出現している。

9. a-1. POE : *life* he lȳfað （*Poenitentiale Ecgberti*, p. 363 <（*Ezek*. 18：21））
   a-2. EWB : *in lyf* he shal lyue
   a-3. AV : he shall *surely* liue,
   a-4. VUL : *vita* vivet
   a-5. HB : ḥāyōḥ yiḥyeh
   1 [H·INF] 2

(= *live*[1] you-shall-live[2]) (*Ezek*. 18：21)
b-1. EWB : *deþ* he schall dye (Visser, p. 415, *Gen*. 26：11)
b-2. EWB : *by deeth* deie he. (*Mark* 7：10< *Ex*. 21：17)
b-3. VUL : *morte* moriatur (*Ex*. 21：17)
b-4. HB : mot̲ tamut̲
(= *Die* he-shall-die) (*Ex*. 21：17)

9a-1にある古英語期の同族目的 life，中英語訳聖書の9a-2の前置詞句 in lyf は共に9a-4のラテン語の同族名詞の奪格形 vita の訳からそれぞれの文献に出現した表現である。これらの同族名詞に対応する欽定訳聖書の訳は強意の副詞 surely である。これらに対応する原典の表現は「定動詞と同一動詞の不定詞」である。原典のこの不定詞は，定動詞を強調する副詞的な機能を持っている。これが9a-3では強意の副詞に訳された原因である。

さて，ヘブライ語で強意の機能を持つ「定動詞と同一動詞の不定詞」を同族目的語に訳した最初の翻訳聖書はギリシャ語訳聖書 Septuagint である。ギリシャ語訳聖書ではこの不定詞を与格形の同族目的語に訳した。同族目的語に訳したのは，原典の不定詞を直訳すると統語上受け入れらなくなるために，同族目的語に変形したと考えるのが妥当であろう。しかしながら，修飾語句を伴わない同族目的語はギリシャ語だけではなくラテン語においても一般的な統語法ではない。しかしながらこのギリシャ語の翻訳方法がラテン語訳において模倣された。ただし，ラテン語訳聖書では奪格形の同族目的語になった。このラテン語の訳が英訳聖書及び宗教関連の文献で直訳された結果，原典では「強意の副詞」の機能を持つ不定詞が限定詞も修飾語句も伴わない同族目的語あるいはその前置詞句として古英語訳聖書や中英語訳聖書に出現したのである。

上例のうち，7a と8a は原典の構造がラテン語訳を経由して，英訳聖書に入ってきた例であり，9a1-2と9b1-2はギリシャ語訳とラテン語訳を経由して受容可能な形態に変形した後，英訳聖書に入ってきた例である。

2．直接訳聖書の英語における原典の影響

初期近代英語訳聖書には原典の言語に忠実に訳出しようとする翻訳者の翻訳姿勢が強く現れている。そのために，原典との比較・対照によって間接訳聖書にはみられない原典の影響が明らかになることがある。

(10a)と(10b)の The Great Bible および欽定訳聖書の文を(10c)の The Revised Version の文および(10d)の The Bishops' Bible の文と比較すると明らかになるように，(10a)と(10b)における主節の否定辞と従属節の否定辞は，互いに他を否定するものではない。また，文脈から判断しても同様の結論に至る。(10c)と(10d)の英訳聖書の文で主節の否定辞が削除されていることから判断すると，主節の否定辞は「否定辞繰り上げ」(neg raising)によって出現したかのように見える。否定辞繰り上げは主節の動詞が意味上「認識的(epistemic)」であるときに起こると言われている (Ohta, 1980：521；Araki and Ukaj, op. cit., 513)。しかしながら，これらの主節の動詞は be 動詞であるにもかかわらず，否定辞繰り上げと類似の

現象が起きている。Williams (1970：66)によれば，(10e)のヘブライ語文にある NEG_1 は NEG_2 を強調するためのものである。英訳聖書の(10a)と(10b)の文における二個の否定辞は，当時の英語における否定辞の作用領域の広さと原典の二重否定の影響によって出現したものであろう。

10. a. GB : Is it *not*[2][because there is *no*[1] God in Israél, that ye go to inquire of Baal-zebúb the god of Ekrōn] ?
    b. AV : Is it *not*[2][because there is not[1] a God in Israel, that ye goe to enquie of Baalzebub the god of Ekron] ?
    c. RV : Is it [because there is *no*[1] God in Israel , ...] ?
    d. BB : Is there not[2] a God in Israel, ... ?
    e. HB : ha $\underbrace{\text{-mibbəlî}}_{NEG_1}$ $\underbrace{\text{'ên-}}_{NEG_2}$'ĕlōhîm bəyiśrā'ēl
    (= ?-*not*-because[2][there-is-*not*[1] god in-Israel ...])
    (*2 Kings* 1：3, Cf., *2 Kings* 1：6, 16)

英訳聖書の否定命令の表現方法は，11a と11b1-2におけるように，大きく 'shall not' による禁止命令と，'not V' による否定命令文に分けられる。

11. a. And Moses saide vnto the people, *Feare ye* <u>*not*</u> [=HB: *'al*], stand still (AV, *Ex*. 14：13)
    b-1. And Pharaoh said, ... you *shall* <u>*not*</u> [=HB: *lo'*] goe very farre away (AV, *Ex*. 8：28)
    b-2. Thou *shalt* <u>*not*</u> [*HB : lo'*] kill. (AV, *Ex*. 20：13)

この 'shall not' の意味については「話者の強い命令，禁止・否定命令」を表し，「特に，聖書関係の英語に多い」と一般に言われている。では，英訳聖書における11-a の否定命令文 Fear ye not.と11-b1の you shall not go very far away.における否定の意味の違いにどのような説明を与えることが可能であろうか。

11a の否定命令文と11-b1-2の shall not による否定命令を対応する原典の表現と比較すると，原典の表現の違いを翻訳英語に導入するために 2 種類の翻訳表現を使用したことが明らかになる。

旧訳原典の言語では，否定の命令は動詞の命令形ではなく，「否定辞＋未完了形」で表している。そして，使用される否定辞には 2 種類ある。それが，12a の'al と，12b の lo'である。11a の否定辞 not は12a のヘブライ語の否定辞'al の訳であり，11b1-2の否定 'shall not' は12b のヘブライ語の否定辞 lo' の訳である。

12. a. *'al*＋Imperfect＝immediate, specific commands (Lambdin, p. 114)
    ＝ denying subjectively as a wish (BDB)

b. *lo'*＋Imperfect＝durative, non-specific commands (Lambdin, p. 114)
＝ denying objectively (BDB)

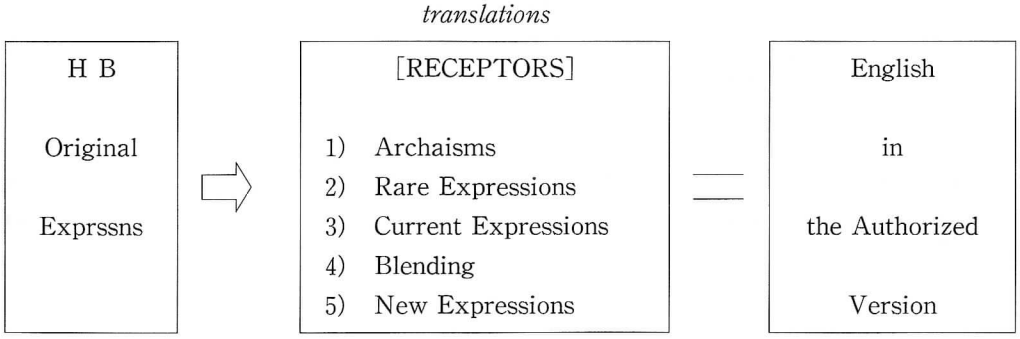
12a の否定辞は「差し迫った，特定の事柄に対する禁止」を表し，12b の否定辞は「長期にわたる，掟のような禁止」を表わす。英訳聖書，特に欽定訳聖書では，11a におけるような「差し迫った，特定の事柄に対する禁止」は否定命令文で訳し，「掟としての禁止，長期にわたる禁止」は 'shall not' で訳している。従って，欽定訳聖書の 'shall not' と not による否定命令には，原典のこのような否定の意味が相補的に存在することになる。

以上のように近代英語訳聖書の中でも直接訳聖書は原典の表現形式を保存しながら訳出する傾向が強いので，英語史や英語意味論の観点だけから分析することに慎重になる必要がある。

3． 欽定訳聖書におけるヘブライ語の翻訳方法

英訳聖書における原典の表現の翻訳方法を調査すると，興味深い現象が見られる。14の真ん中にある四角形は，欽定訳聖書における統語法を通時的な視点から調査した結果を示している。欽定訳聖書の英語には「当時としてはすでに古風になっていた英語が使用されている」というのが定説になっている。確かに，欽定訳聖書には古英語期に使用されたが，翻訳当時使用されていなかった統語法もみられるが，一方で，翻訳当時衰退しようとしていた統語法，あるいは逆に，まだ文語では一般化していなかった新しい統語法，翻訳当時一般的な統語法，さらには原典の文構造と混交した構造の文までみられる。これら多様な構文の出現は，聖書翻訳者が原典の構造を可能な限り英語においても保存するために，英語に存在するあるいは存在した多様な構文を受け皿，receptor，として利用したことにあると考えられる。

14. Direct Translations



1) Archaisms:

上記例文6a で imagine が man と複数呼応しているがこの種の例は，ME 期に起こっている。Mustanoja (1960, 221) 参照。古英語期に用いられた非人称受動構造が欽定訳聖書で使用されている。例文は Hashimoto (1996, 122-123) 参照。

2) Rare Expressions:

これには2種類ある。一つは，古くなって衰退気味のために使用が少なくなってしまったもの，他は当時としては未だ新しい表現であるために使用が少ないものである。衰退のために少なくなってしまったものはarchaismと重なる。その例が15a-bである。

15. a. AV : and to him shalbe giuen *of the gold of Sheba*; (*Ps*. 72 : 15)
HB : wəyiten-lô mi-zzəhaḇ šəḇā'
(=and-shall-be-given to-him of-the-gold-of Sheba)
b. AV : So *the poore* hath hope,
HB : wattəhî la-ddal tiqwāh
(=and-is to-the-weak hope) (*Job* 5 : 16)

これは，partitive ofである。欽定訳聖書の翻訳当時すでに衰退傾向にあり，その使用は特定の動詞の目的語に限定されていた。しかし，欽定訳聖書ではpartitive ofの使用は頻繁であり，その用法も極めて自由であある。15aのpartitive ofは主語として機能している。また，15bの「the+形容詞」は単数の人間を表す用法である。この用法も，当時，衰退傾向にあったにもかかわらず，複数用法と同様，頻繁に用いられている。

翻訳当時は新しい表現であるために，少なくとも，文語では一般化していなかった統語法もある。その一つが進行形である。

16. a. AV : and behold, the camels were comming.
HB : wəhinnēh gəmallîm bā'îm:
(= and-behold camels {were} coming) (*Gen*. 24 : 63)
b. AV : Ioseph ... was feeding the flock with his brethren
HB : yôsēp̄ ... hāyāh rō'eh 'eṯ-'eḥâw baṣṣō'n
(=Joseph ... *was*[1] *feeding*[2] with-brothers-of-him (to-) the flock)
(*Gen*. 37 : 2)

進行形は欽定訳聖書翻訳の頃は，文語ではほとんど使用されず，当時としては口語的な表現であった。しかし，威厳のある文体と言われている欽定訳聖書の散文においても，16の例のように控えめではあるが，進行形が使用されている。

17. Thirty and two ; thirty two ; two and thirty

(Hashimoto 1996)

	thirty and two	two and thirty	thirty-two	TOTAL
AV	246 (88.5%)	30 (10.8%)	2 (0.2%)	278 exx (100%)
Shakespeare	2 (3.9%)	36 (70.6%)	13 (25.5%)	51 exx (100%)

Scope of the corpus : AV = *Genesis-Esther* ; Shakespeare = statistics based on Spevack (1973)

17の表は欽定訳聖書における基数詞の表現方法を Shakespeare と比較したものである。Shakespeare では two and thirty というゲルマン語本来の表現が70%以上を占めている。これが当時の一般的な表現形式であったと考えられる。一方，thirty and two という新しい表現形式の使用はきわめて少ないというのが当時の現状である。しかし，欽定訳聖書ではこの thirty and two という表現形式が支配的である。当時としてはマイナーな表現形式が欽定訳聖書では支配的な表現形式として採用されている。

3) Current Expressions

18の go to は，欽定訳聖書の翻訳当時には命令文の前にしばしば置かれた。Partridge は18の例を聖書から引用し，これを当時の「はやり言葉」の範疇に分類している。その機能については，Visser は起動相を強調したと述べ，Franz は「怒りや，激励」を表したと主張している。

18. AV : *Goe to*, let vs make bricke, and burne them thorowly. (*Gen.* 11 : 3)
HB : hāḇāh nilbənāh ləḇēnîm wəniśrəpāh liśrēpāh
(= *come* [IMPERATIVE] let-us-make bricks)

4) Blending

19は原典の言語構造との blending の例である。

19. a. AV : And *Noah* went in, *and his sonnes, and his wife, and his sonnes wiues* with him, into the Arke, ...
b. HB : wayyāḇō' nōªḥ ûḇānâw wə'ištô ûnəšê-ḇānâw 'ittô 'el-hattēḇāh
([V] [3·S·M]) ([NP]$_1$ [3·S·M]) ([NP]$_2$ [3·Pl·M]) ([NP]$_3$ [3·S·F]) ([NP]$_4$ [3·Pl·F])
(= and-*went-in* Noah^1 and-sons-of-him^2 and wife-of-him^3 and-wives-of sons-of-him^4 with-him into-the-ark ... (AV, *Gen.* 7 : 7)

英訳聖書にはこの語順の文が頻繁に起こっている。これは，旧訳原典の言語の基本語順が英語の語順と混交したものと考えることができる。旧約原典の言語の語順は VS である。その例は19b である。すなわち原典では動詞 went-in の主語は複合主語 Noah and-sons-of-

him and wife-of-him and-wives-of sons-of-him である。しかし，動詞 went-in は複合主語を構成する最初の NP，Noah に呼応している。これは，ヘブライ語に一般的な呼応の仕方である。この呼応と語順を持つ文を訳するために，主語と呼応している NP だけを英語の主語の位置に移動し，接続詞 and を含めた複主語の残りの部分は原典の語順を保持したまま訳している。

5） New Expressions

原典の構造をなぞったために新しい表現が英語に導入されることがある。その例が20である。筆者の今日までの調査では，N_1 of N_2において N_1が具象名詞である'a fool of a man'型表現が初めて登場する英訳聖書は，OED における適例よりも128年早い1535年の Coverdale's Bible であり，その例文は20と21である。詳細は Hashimoto（1998：264-268）参照。

20．1535：And Benaia ... smote two mightie giaūtes of ẏ Moabites,
（CB, *1 Chr*. 12(11)：22）

21．1535：He smote two lyons of the Moabites.（CB, *1 Chr*. 12(11)：22）

22．H B：hû' hikkāh 'ēṯ šənê $\underbrace{\text{'ărî'ēl}}_{1}$ $\underbrace{\text{mô'āb}}_{2}$（*1 Chr*. 11：22）

（= he smote [AM-] two-of lion-of-man-of[1] Moab[2]）

さて，以上のうち，15から21までの文は，すべて，旧訳原典の統語法を英語に導入したものである。英語の側からこの現象を考察すると，聖書翻訳者は原典の言語にできるだけ忠実に訳出するために，acceptability が高いものから低いものまで，acceptability の範囲に入るものならば，それを利用して原典の統語法を英語に持ち込んだと言える。従って，対応する旧訳原典の統語構造の意味は，当時一般に使用されていた英語の統語構造の意味と同じであるとは限らない。例えば，16b の進行形は原典の構造の訳から出現したものである。対応する原典の類似構造は，長期にわたる同じ行為の繰り返しを表す。従って，原典では，16b の進行形は主語の仕事，なりわい，すなわち，flock-keeper を表している。18の Goe to は原典でも同じく動詞の命令形であるが，その機能は Franz や Visser の説明とはやや異なり，聞き手に注意を向けさせるための間投詞の機能を果たしている。

4．おわりに

以上のように，英訳聖書には，古語法から新しい語法まで，非常に長いタイム・スパンの中で使用された統語法や表現が混在している。これは，欽定訳聖書だけではなく，古英語訳聖書や，中英語訳聖書についても，程度の差はあれ当てはまる。この事実に注目すると，新しい観点から聖書の英語を言語資料として利用できるのではないかと思われる。例えば，Harris & Cambell（1995）が言及している文法変化や再分析の際に生ずる，新しい表現と旧表現の「重なり」や，旧表現の消滅などの分析に聖書の英語が貢献できる可能性がある。

<注>

* 本稿は1998年5月に京都外国語大学で開催された近代英語協会第16回大会でのシンポジュウム「近代英語統語論研究の現状と課題」(司会：橋本功，講師：青山学院大学教授秋本実治，文教大学教授岸田直子，愛知県立大学助教授中村不二夫，橋本功）において筆者が口頭発表した「言語資料としての聖書の英語」を論文用に書き改めたものである。

TEXTS EXAMINED

Ælfred's Laws. B. Thorpe (ed.) 1840. *Ancient Laws and Institutes of England*. London: *Commissioners on the Public Records of the Kingdom*, pp. 44-101.

The Anglo-Saxon Gospels = The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale. (ed.) J. Bosworth. 1865. London: John Russell Smith.

AV= *The Holy Bible, Contayning the Old Testament, and the New : Newly Translated out of the Originall tongues : & with the former translations diligently compared and reuised, by his Maiesties speciall comandment. Apppointed to be read in Churches*. 1611. London: Robert Barker.

BB= The Bishops' Bible 1568 = *The Holie Bible Conteynynge the Olde Testament and the Newe*. 1568. London: R. Jugge.

CP= *The Book of Common Prayer, and Administration of the Sacraments : and other rites and ceremonies of the Church of England, with the Psalter or Psalmes of David*. 1637. Cambridge: Thomas Buck and Roger Daniel.

EWB= The Early Wycliffite Bible

OT = *MS. Bodley 959 : Genesis - Baruch 3,30 in the earlier version of the Wycliffite Bible*. 5 vols. (ed.) C. Lindberg. 1959-1969. Stockholm: Almqvist and Wiksell.

NT = *The Holy Bible : containing the Old and New Testament, with the Apocryphal Books in the earliest English versions made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and his followers*. Vol. 4 (eds.) J. Forshall and F. Madden. 1850; (repr.) 1982. New York: AMS Press.

GB= The Geneva Bible = *The Bible and Holy Scriptvres Conteyned in the Olde and Newe Testament. Translated according to the Ebrue and Greke, and Conferred With the Best Translations in Diuers Languages. 1560*. Geneva: Rouland Hall.

HB= *Biblia Hebraica*. (ed.) R. Kittel. 1977. Stuttgart: Deutsche Bibelstiftung.

NRS= *The Holy Bible : new revised standard version*. 1989. New York and Oxford: Oxford University Press.

OEH= Ælfric's Heptateuch = *The Old English Version of the Heptateuch : Ælfric's treaties on the Old and New Testament and his preface to Genesis*. (ed.) S. J. Crawford. 1922. EETS. OS. 160; (repr.) 1969.

OE Homilies I = *Old English Homilies and Homiletic Treatises of the twelfth and Thirteenth Centuries*. (ed.) R. Morris. 1873. EETS. OS. 53; (repr. as one vol.) 1973.

OE Homilies II = *Old English Homilies of the Twelfth Century*. (ed.) R. Morris. 1867-1868. EETS. OS. 29, 34; (repr. as one vol.) 19

PB = Purver's Bible = *A New and Literal Translation of All the Books of the Old and New Testament ; with notes critical and explanatory*. (trans.) A. Purver. 1769. London: W. Richardson and S. Clark

POE= *Poenitentiale Ecgberti.* (ed.) B. Thorpe. 1840. *Ancient Laws and Institutes of England.* London : Commissioners on the Public Records of the Kingdom, pp. 362-92.

REB= *The Revised English Bible.* 1989. Oxford : Oxford University Press and Cambridge : Cambridge University Press.

RV= *The Revised Version*

NT : *The New Testament ... Translated out of the Greek : being the version set forth A. D. 1611 compared with the most ancient authorities and revised A.D.* 1881. Cambridge : Cambridge University Press ;

OT : *The Holy Bible ... Translated out of the Original Tongues : being the version set forth A.D. 1611 compared with the most ancient authorities and revised* ... 4 vols. 1885. Oxford : Oxford University Press.

VUL= The Vulgate=Vulgate=*Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem.* 2 vols. (ed.) R. Weber. 1969. Stuttgart : Wurttembergische Bibelanstalt.

REFERENCES QUOTED

Araki, K. and M. Ukaji. 1984.『英語史 A』(『英語学体系』第10巻) 大修館.

BDB= *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.* F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs. 1906 (repr.) 1959. Oxford : Oxford University Press.

Harris, A. C. and Cambell L. 1995. *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspectives.* Cambridge : Cambridge University Press.

Christophersen, P. 1939. *The Article : a study of their theory and use in English.* Copenhagen : Munksgaad.

Franz, W. 1958.『初期近代英語の研究』 (trans.) K. Miyabe, et al. from *Zur Sybtax des älteren Neuenglisch,* (Englische Studien) 1892-95. 南雲堂.

Hashimoto, I. 1996.『聖書の英語—旧約原典からみた—』英潮社

———— 1998.『聖書の英語とヘブライ語法』英潮社

Ichikawa, S. 1937 (repr.) 1969.『聖書の英語』研究社

Lambdin, T. O. 1973. (repr.) 1990. *Introduction to Biblical Hebrew.* London : Darton, Longman and Todd.

Mustanoja, T. 1960. *A Middle English Syntax.* Helsinki : Société Néophilologique

OED= *The Oxford English Dictionary.* (eds) J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. 1989[2]. Oxford : Oxford University Press.

Ohta, A. 1980.『否定の意味』大修館書店

Otsuka, T. 1967[10].『シェクスピア及び聖書の英語』研究社.

Partridge, A. C. 1973. *English Biblical Translation.* London : André Deutsch

Visser, F. Th. 1963 (pt. I), 1966 (pt. II), 1969 (pt.III, 1st half (III A)) & 1973 (pt. III, 2nd half (III B)). *An Historical Syntax of the English Language.* 4 parts. Leiden : E. J. Brill.

Williams, R. J. 1970. *Hebrew Syntax : an outline.* Toronto : University of Toronto.